



第 2 部

成果の普及

第2部 成果の普及

第1章 学内

第1節 校内研究発表会

9月26日(水)、SGH校内研究発表会をLHRの時間に本校講堂で開催した。中学1年生から高校3年生まで、全校生徒を対象として発表会を開催したのはこれが初めてである。

1. 開催概要

- 1) 日時 平成30年9月26日(水) 6限 14:20-15:10
- 2) 場所 本校講堂
- 3) 対象 中学高校全生徒約640名と全教員
- 4) 発表者 SG2期生、3期生、スリランカプログラム参加者
- 5) 目的 全校生徒がSGH課題研究の成果を共有することにより、国際的な社会問題とその課題解決への関心や意欲を喚起し、日々の学びと進路実現に良い影響をもたらす。

2. 発表内容

1) 佼成女子SGHの概要

SG2期生(高3)の生徒2名が、SGHの概要と研究発表会の趣旨を説明した。「課題研究」とは自分が興味のあることを探究するために研究テーマを設定して調査研究する学びであることを分かりやすく伝えた。また、社会的な課題を発見して解決策を考察することの面白さを知ることが、この日の発表会の目的だと伝えた。



2) スリランカ青少年交流 体験報告

2018年3月のスリランカ青少年交流プログラムに参加した高2特進文理クラスの生徒1名が、「スリランカの人々と上座部仏教の関わり」をテーマに日本語で発表した。本生徒は、訪問先のヴィサカ高校の校庭や、町中のなにげないスペースに仏像が安置されており、人々が祈りを捧げる光景を目にした。こうした観察や現地の人々へのインタビューを通して、上座部仏教はスリランカの人々にとって日常生活の一部であるということを見出したことを説明した。

3) タイ・フィールドワーク発表

SG3期生(高2)の生徒4名が、2人1組で英語で発表した。

1組目は「Hin Lad Nai Karen Village」と題して、山岳少数民族カレン族の習俗や生業を英語で説明した。焼き畑農業によって自給自足生活を送る様子を紹介し、大量生産・大量消費生活に慣れた私たちの生活に一石を投じる発表であった。

2組目は、タイ西部カンチャナブリの「New Life Project (生きなおしの学校)」を英語で説明した。タイのスラム街には、虐待や薬物などで人生に希望を見いだせない状況の子ども達がいることを概説し、生きなおしの学校で行われている支援活動について調査報告した。

4) 課題研究発表(高3SGクラス)

SG2期生(高3)の生徒3名が、ロンドン大学SOAS校で作成した研究論文をもとに、各自の

研究についてプレゼンした。1人目は英語で発表し、2,3人目は日本語で発表した。

1人目は「The succession of traditions in a Karen village in Thailand: Does receiving higher education help to maintain traditions?」という研究テーマを掲げ、どうすればカレン族の生活文化を継承できるかという問いを立て、現地でインタビュー調査を行い、高等教育が果たす役割を考察した。

2人目は「タイの障がい者の現状 -支援は行き届いているのか-」という研究テーマを掲げ、タイの障害者の所得に着目し、健常者と比較するだけでなく、地域間の所得格差を明らかにして分析することにより、障害者支援の課題を考察した。

3人目は「ハンディクラフトの普及 -フェアトレードとハンディクラフト-」という研究テーマを掲げ、手工芸品が普及しない原因を明らかにするため、消費者にアンケート調査するだけでなく、二大フェアトレード認証団体を比較分析して考察した。



3. 質疑応答と振り返り

生徒たちの発表後、質疑応答の時間を設けて全生徒に向けて質問を呼びかけたところ、高3特進文理クラスの生徒達から次々と手が挙がった。英語での発表、日本語での発表、それぞれに対して、内容に関する具体的な質問が挙げられた。発表者側は、上手に答えられた生徒もいれば、想定外の質問に慌ててしまい上手に答えられない生徒もいて、今後の学びに向けて大変良い刺激となった。



今回の研究発表会では、事前にワークシート型プログラム冊子を全校生徒に配布し、発表ごとに【要点】と【気づき・感想・疑問点】を書き込むよう指導した。プログラムの最終頁に、全体を振り返っての感想欄とアンケートを載せ、発表会後に各教室で記載させて回収した。

4. アンケート結果と生徒感想

	該当する	やや 該当する	あまり 該当しない	該当しない
1. 佼成女子 SGH の取組みについて理解が深まった。				
中学	58.2%	39.6%	1.1%	1.1%
高校	59.3%	35.0%	4.5%	1.2%
2. 今後、国際交流や異文化理解を進めていく意欲や関心が高まった。				
中学	37.4%	52.7%	9.9%	0.0%
高校	50.1%	39.1%	8.8%	2.0%
3. 今後、自らテーマを設定して社会的な課題を探求する意欲や関心が高まった。				
中学	39.6%	45.0%	14.3%	1.1%
高校	41.8%	40.3%	13.2%	4.7%

◇中学生の感想より

- ・ 英語の発表がかっこよかった。それぞれの国で起きていることに真剣に考えていてすごいと思った。
- ・ 自分の興味のある分野を持つことの大切さを知った。
- ・ 海外へ行き、興味のあることを調べ、問題解決したい。
- ・ 日本も公共施設だけでなく、学校をバリアフリー化するべきではないか。
- ・ 中学生のために英語発表で日本語字幕がほしい。
- ・ **SG** クラスに行く道もいいなと思った。**SG** に興味持った。タイのフィールドワークに参加したいと思った。
- ・ 身近なことで1つ何かを見つけ、研究していきたい。
- ・ 自分で問題を見つけ、原因を予想し調べて、結論を出して次にいかす流れが大切だと分かった

◇高校生の感想より

- ・ 個々が課題研究、探求研究を行う際に問題提起・仮説をすることで交流や留学、フィールドワークを通じた学んだことを整理し分かりやすく他者に説明しているところに関心した。
- ・ タイの障害者の貧富の差やフェアトレードの認知などの社会問題についても先輩方の話から触れられることができ、世界についての課題の理解が深まった。
- ・ 同じアジアでも様々な宗教・文化があり、日本よりも信仰深く自然を大切にしていることが分かった。英語を話せる・話せないではなく、自ら疑問を持ち探求していくという学びの姿勢が大切だと今回の発表を聞いて感じた。
- ・ 国際交流についての理解を深めることが出来た。英語での発表で分からない部分があるので、日本語で少し解説をしてもらいたい。
- ・ 高校時代から研究ができることはいいことだと思った。
- ・ 沢山の発表を聞いてどの発表もしっかり目的をたて、その目的に沿って発表していた。また、新たな課題を見つけその課題に取り組もうとしている先輩の姿はかっこよく私もそういう人になりたいと思った。
- ・ テレビ等はいい面しか報道しないため、宗教のことや障害者の生活のしづらさで沢山の問題点があるのだと感じた。
- ・ 特進文理クラスもこのような体験型学習を取り入れてほしいと思いました。
- ・ これから先の世界を動かしていくのは高校生の私たちなので、私たちが社会の中の問題をみつけ、それに対して何ができるかを考えることが大切だと思う。
- ・ **SGH** で行っていることは、ただ外国に行って英語力を高めるという印象でしたが、今回のプレゼンを見て将来社会に出たときに役に立ちそうで、高校時代にこのような経験をすることはすごく為になると思いました。
- ・ 英語を学ぶことが重要だと思っていたが、もちろん英語も大切だと思ったけど、自分でテーマを決めてそれについて調べることが大切だと分かった。外国や異文化についての学び方、英語力を身に付けることができる **SGH** はすごいと思った。
- ・ 国際的に活躍するために経験を増やすことは大切だと思う。日本とは全然違う感性に直に触れ視野を広げていけるのは将来に役立つと思い、自分も実践していきたい。また研究発表会の構成がとても分かりやすく、提起してくれた問題も考えさせられるものばかりだった。

5. 考察

1) 活動内容の周知の効果

高校全生徒へのアンケート結果によると、校成女子 **SGH** の取組みについて理解が深まったとする肯定的な回答が **94.3%** となった。コース制特有の壁を超えて、多くの生徒が **SGH** 活動の具体的な中身をイメージできたようである。外部向けだけでなく全校生徒向けに研究発表会を実施するこ

との意義を確認できた。

2) 国際交流および課題探究への意欲向上の効果

高校全生徒へのアンケート結果によると、国際交流や異文化理解への意欲関心が高まったとする肯定的な回答が 89.2%、課題探究への意欲関心が高まったとする肯定的な回答が 82.1%となった。いずれも高い数字であると評価できる。

アンケートの数字だけでなく、生徒の振り返り感想や、質疑応答が活発に行われたことも、こうした関心の向上を裏付けていると言えるだろう。

3) 英語発表に対する配慮

生徒の感想の中には、英語での発表に肯定的な意見が多く見られる一方、日本語での字幕が欲しいなどの要望も見られた。教員からは、生徒達以上に英語発表に対する否定的な意見が寄せられた。

こうした反応は事前に想定できたため、今回、英語と日本語の発表を約半分ずつにし、プログラムに日本語で発表内容の要点を記すなど、英語が得意でない生徒に配慮して企画した。次年度以降、さらなる具体的な配慮が必要か、検討したい。

4) 発表者の選定

今回、SG クラスから 9 名、特進文理クラスから 1 名を選抜し、海外フィールドワークの成果を中心に発表した。2019 年度入学生より総合的な探究の時間を活用して課題探究学習を進めていく。今後は国内での課題研究活動も発表対象とすることにより、多くのコースの生徒達から発表者を選定できないか検討したい。さらに全学的な研究発表会となるよう進化させていきたい。

第2章 学外

第1節 学外向け研究発表会

9月29日（土）、SGH研究発表会を本校で開催した。発表会の概要は下記の通り。

1. 開催概要

- 1) 日時 平成30年9月29日（土）
第1部：11:00-12:40 第2部：13:10-15:30
- 2) 場所 本校 大会議室、グローバルセンター、3年A組教室
- 3) 対象 SGH運営指導委員、SGH校、大学関係者、保護者他
教育関係の参加者は下表の通り
- 4) 発表者 SG2期生、3期生、スリランカプログラム参加生徒
- 5) 目的 公開授業、生徒による研究発表会の発信を通じ、本校SGH事業5年目としての成果の披露をする。

(敬称略)

氏名	機関名・役職
本郷宏一	横浜国際高等学校 副校長
高橋清貴	恵泉女学園大学 教授
松井ケティ	清泉女子大学 教授
岡田基幸	信州大学 特認教授
渡邊泉	国際基督教大学 准教授
岸本昌子	日本国際協力センター 常務理事
中野孝弘	興学社興学学園
福本雅俊	コアネット教育総合研究所 室長
山下研一	SMART 広報 ThinkUP 代表
後藤健夫	森上教育研究所 編集長

2. 発表内容

1) 佼成女子SGH事業概要

SGH事務局長の宮川典子教諭が本校のSGH事業概要を説明した。説明項目は下記の通り。

1. 構想名・理念・仮説
2. 特進文理コース スーパーグローバルクラス概要
3. 特進留学コース概要
4. 日本スリランカ青少年交流
5. 国際交流

2) 公開授業 1

授業名：英会話

学 年：高校 1 年 E 組 特進留学コース 15 期生 14 名
(この授業はクラスを半分に分けて実施。)

担当者：Sara Suzuki

言 語：英語

場 所：管理棟 2 階グローバルセンター

概 要：「Presenting the Results of a Survey on a Social Issue」と題し、各生徒が「10 代の結婚観」「10 代のスマホの使い方」といった各々の設定したテーマについての調査結果を、iPad と電子黒板を使って英語でプレゼンテーションした。



3) 公開授業 2

授業名：高大連携授業

学 年：高校 3 年 A 組 SG クラス 10 名

担当者：秋田聡大

言 語：日本語

場 所：高校 3 年 A 組教室

概 要：慶應義塾大学公認学生団体 S.A.L.の大学生を招き、「ウイグル問題」をテーマとして、中国の新疆ウイグル自治区一帯に住むウイグル族の文化が失われつつある問題についてワークショップ授業を開講した。

本時に先立ち、6 月 16 日に S.A.L.の大学生とペルーとボリビアの女性問題をテーマとしたワークショップ授業を開催した。その時には、活発な議論が展開され、授業の終盤では、異文化圏における社会問題を部外者である私たちが「問題」として取り上げること自体の是非について考察が及んだ。

今回の授業では、前回の気づきも踏まえて、第三者としてどのように異文化の国際問題に関わるか、文化相対主義を超越する視点を獲得できるような議論が展開された。教員は、予定調和の授業にならないように授業を見守りながら、その場のダイナミックな議論の展開を活かすよう適宜働きかけを行った。



4) 佼成女子 SGH の概要

高 3 SG クラスの生徒 1 名が、SGH 活動の概要を日本語で説明した。生徒視点で SGH 活動の全体像を説明後、7 月に実施した世田谷区立烏山中学校での出張授業について説明した。タイの子どもたちが抱える課題について、SG2 期生 10 名と中学 3 年生たちが一緒に考えるワークショップ授業の様子を紹介。自分たちで授業を企画構成する難しさや、中学生の関心を引き出す工夫について語った。

5) スリランカ青少年交流 体験報告

2018 年 3 月のスリランカ青少年交流プログラムに参加した高 2 特進文理クラスの生徒 1 名が、「スリランカの人々と上座部仏教の関わり」をテーマに日本語で発表した。本生徒は、訪問先のヴィサカ高校の校庭や、町中のなにげないスペースに仏像が安置されており、人々が祈りを捧げる光景を目にした。こうした観察や現地の人々へのインタビューを通して、上座部仏教はスリランカの人々にとって日常生活の一部であるということを見出したことを説明した。

6) グローバルリンクシンガポール 2018 参加報告

Global Link Singapore 2018 ポスターセッション・社会課題部門で 2 位入賞した高 3 生徒による報告。まずは大会概要や現地での気づきを日本語で説明し、その後、現地で行ったポスターセッション発表“Endangered Minority Languages in Thailand”（タイの少数民族言語の危機）を、後輩の高 2 生徒と一緒に英語で実演した。2017 年度 SGH 全国高校生フォーラムの時の発表からどのように発表内容はポスターを進化させたか比較解説した。大会の詳細については第 2 部第 2 章第 2 節参照。

7) タイ・フィールドワーク発表

SG3 期生（高 2）の生徒 4 名が、2 人 1 組で英語で発表した。内容は校内研究発表会と同じ。

8) ロンドン大学研修報告（高 3 SG クラス）

SG2 期生（高 3）の生徒 1 名が、ロンドン大学 SOAS 校および語学学校での研修の様子を英語でプレゼンした。ロンドン大学研修の詳細については第 5 部第 1 章第 2 節参照。

9) 課題研究発表（高 3 SG クラス）

SG2 期生（高 3）の生徒 2 名が、ロンドン大学で作成した研究論文をもとに、各自の研究について英語でプレゼンした。

1 人目は「Fair Trade Coffee in Japan -The Possibility of Spreading Coffee as a Fair Trade Product-」という研究テーマを掲げ、コーヒーの需要が高まり低価格販売が支持を集めている中、どのようにしたらフェアトレード商品としてのコーヒーを一般の市場で広められるか考察した。



2 人目は「The Possibility of Japanese Companies Contributing towards the Sustainable Development Goals in Thailand -The case of AJINOMOTO-」という研究テーマを掲げ、タイ味の素財団による「50 years, 50 schools」プロジェクトの事例研究を通じて、日本企業はタイにおいて持続可能な支援システムを構築しているのか考察した。

なお、2 人の英語による研究発表時には、参加者にパナガイド（無線ガイドシステム）を配布し、生徒による同時通訳を聞くことができたようにした。

3. 質疑応答と講評

発表後は質疑応答が行われ、大学の先生方から具体的に周囲に対してどのようなシェアを行ったか、またこの研究に際して直面した困難や今後のアクションプランについて等の質問があった。生徒達は尻込みすることなく、主に英語で、時々日本語を交えて前向きに回答した。清泉女子大学の松井ケティ教授からは、「研究はここで終わらない、続いていくという姿勢がすばらしい」とご評価頂き、来場者の方々からも大きな拍手をいただいた。本校 SGH 運営指導委員である一般財団法人日本国際協力センター（JICE）常務理事の岸本昌子先生からは、以下の通りご講評をいただいた。

「今日こちらに来て校舎を歩きましたが、廊下に皆さんの活動報告が掲示されているのを拝見して、短時間で



世界一周旅行をしたかのような気持ちです。この SG クラスの生徒だけでなく、学校全体に広報されているなという印象を受けました。大学からの出前授業、逆に中学への出前授業といった広がりもすばらしい。こんなにいきいきと活動できている学校はほかにはないのではないのでしょうか。さらに、皆さんが築いたプラットフォームから、さらに進化した研究を後輩の方たちが続けていただければいいなと思いました」

4. 考察

1) 公開授業の意義

今回、SGH 研究発表会として活動報告や生徒発表を披露するだけでなく、実際に行っている授業を公開したのは意義があったと考える。英会話の授業では、単にネイティブ教員による会話練習という一般的な授業ではなく、各生徒が自ら設定したテーマをもとに調査した結果を英語でプレゼンするという形の授業を展開した。入学して半年しか経たない高校 1 年生でも英語で課題研究できることを示すことができた。また、高大連携授業では、大学教授による講演授業ではなく、国際問題に関心の高い大学生たちによるワークショップ授業を公開した。ウイグル問題という政治的にセンシティブな要素をはらんだ国際問題を取り上げたが、大学生達が事前によく議論して熱心に準備してきたおかげでテンポ良く対話が進み、高校 3 年生にとって刺激的な授業となった。

このように、現場の教員が新たな授業を開発することで SGH としての価値を創出している姿を見せることができたのは大変有意義であった。

2) 質疑応答に見える生徒達の成長

生徒達にとって研究発表会は、自身の研究に対して外部の方々から直接反応を得ることのできる数少ない機会の 1 つである。特に、大学教授からご質問やコメントを頂くことができるのは大変貴重な経験となる。今回、質疑応答の時間に、信州大学の岡田教授や清泉女子大学の松井教授から発表者全体に向けて質問を頂いた際、SG クラスの高校 3 年生たちは指名されずとも自ら挙手して回答し、その内容も、質問されたことに即した的確なものであった。また、発表会終了後も、生徒達は自ら教授陣のもとへ行き、自身の研究発表に対する意見や助言を求めている。こうした生徒達の姿勢こそが、日々の SGH 教育活動によって育まれた大きな成果と言えるだろう。

第2節 講演会

2018 教育 IT ソリューション EXPO 講演

日 時： 2018年5月16日（水）

会 場： 東京ビッグサイト

主 催： リード エグジビション ジャパン株式会社

- 目 的：
- ・本校の SGH の取り組みの紹介
 - ・NPO 法人アスカアカデミーのオープンエデュケーションリソースを使用した授業に関する講演
 - ・福原美三氏（アスカアカデミー）と渡瀬恵一氏（玉川学園）とのパネルディスカッション

*NPO 法人アスカアカデミー

E-Learning 提供会社ネットラーニンググループが支援する NPO 法人。
世界の高品質でオープンな教育資材（OCW、OER）を日本の学習者向けに提供をしている。AFP 通信（フランス通信：Agence France-Presse）のニュースや MIT（マサチューセッツ工科大学）の講義などインターネット上で、学習できるよう教材を提供している。

講演者	宮川 典子 SGH 事務局長
講演 タイトル	講演：Open Educational Resources の活用について パネルディスカッション：オープン教材のグローバルな教育における実践的活用
講演内容	<p>本校のスーパーグローバルクラスは、アスカアカデミーから紹介して頂いたオープンリソース（APF 通信など）を利用して生徒に動画翻訳のボランティアを行わせている。翻訳をただするだけではなく、他のタスクも織り込み 4 技能をバランスよく身につけることにもつなげている。また、APF 通信などの動画を利用した活動は CLILL の原則に基づいており、「異文化理解や国際問題の要素を入れる」「Authentic な素材を扱う」「文字だけでなく音声、数字、視覚などを使う」というような生徒達が学ぶための要素を含むことができる。生徒達はいくつかのテーマから題材を選択し、それに関して後にリサーチを行い、動画の内容の説明と自分で調べた内容に関して英語でプレゼンを実施した。生徒が実際にプレゼンを行った原稿とパワーポイント<資料 1>についても紹介をした。</p> <p>またスーパーグローバルクラスは探求学習を行っており、生徒達が必要な国際的な知識や教養に関してもこの教材を通じて深く学ぶことができる。SGH 校としての取り組みについても紹介をすることができた。</p>



<資料 1 > 生徒原稿

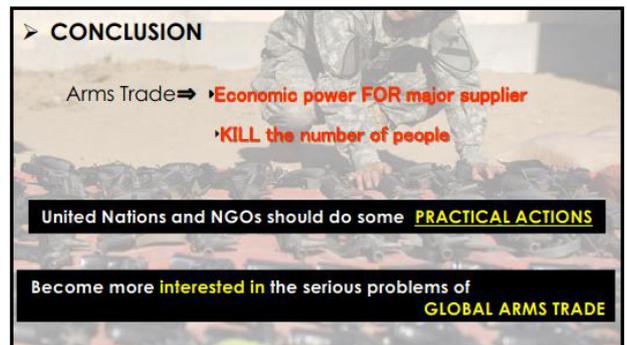
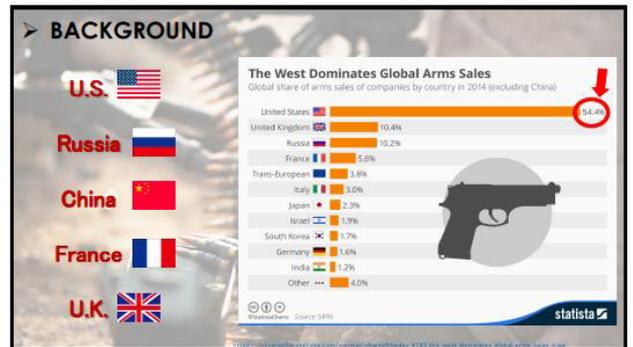
Global Arms Trade

I would like to talk about Global Arms Trade and Arms Trade Treaty. Global arms trade is one of the most important social problems in the world. The number of deaths from arms reaches 500 thousand in one year in the world.

First, I will tell you about the background of global arms trade. The value of international trade in conventional weapons is about the size of 100 billion US dollars in one year. What is the conventional weapons? Conventional weapons are such as missile, tank, light weapons other than nuclear weapons. Some 54% of global exports originate from the US, Russia, China, France. And the UK is also a major supplier. Global trade in major conventional weapons systems has reached its highest level since the end of the Cold War, according to a report from the SIPRI (Stockholm International Peace Research Institute). Currently, the arms trade has less restrictions than bananas. Easy access to weapons cause terrorism, genocide and so on.

Second, I'd like to talk about a countermeasure taken for the arms trade. The United Nations enforced the Arms Trade Treaty called ATT to reduce the transfers of conventional weapons in December in 2014. This treaty aims to ensure member states avoid breaking international embargos and to reduce the number of weapons used for genocide, war crimes or terrorism. However, major suppliers including the US, Russia, and China have not signed ATT yet. According to Human Rights Watchdog Amnesty International, IS has been using arms and ammunition from at least 25 countries including Iraq, the US, China, Germany, and Belgium. We can say that the major suppliers support those terrorists by providing weapons.

In conclusion, the global arms trade is a very serious social problem in the world. The profit of arms trade is important economic power for major supplier. At the same time, many people have been killed by them. The United Nations and some NGOs should do some practical actions. To do that, we had better become more interested in global arms trade and to get to know about it.



第3章 外部研究発表会への参加

第1節 2018年グローバルリンク・シンガポール

日 時：2018年7月20日（金）～7月25日（水）

場 所：シンガポール国立大学（シンガポール）

参加生徒：1名（高校3年）

引率教員：宮川 典子（SGH 事務局長）

企画・運営団体

主 催	グローバルリンク・シンガポール実行委員会 委員長 公益財団法人 日本修学旅行協会 理事長 竹内 秀一 委 員 原 正彦 東京工業大学教授（TKTキャンパスアジアプログラム構想責任者） 松本 茂 立教大学教授、グローバル教育センター長 高橋正征 東京大学名誉教授（日本科学協会理事） 町田武生 埼玉大学名誉教授（JST科学研究実践活動推進PGM推進委員長） 古野浩樹 株式会社ジェイティービー グループ本社執行役員 <順不同、敬称略> ※2017年11月時点
企画運営	JTBグループ
後 援	公益財団法人 日本修学旅行協会 シンガポール政府観光局（STB） 国際機関 日本アセアンセンター 国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）
運営協力	シンガポール科学技術研究庁（A*Star）、シンガポール国立大学（NUS） Science Center Singapore、東京工業大学 TKT CAMPUS Asia、SGH甲子園事務局、 立教大学、NPO法人日本サイエンスサービス（NSS）、PICO factory Japan 一般社団法人日本アクティブラーニング協会、株式会社ベネッセコーポレーション、 株式会社新興出版社啓林館（順不同）

<https://www.jtbbwt.com/gsl/program/>より転載

研修概要	<p>2017年全国高校生SGH研究発表会において文部科学大臣賞を受賞し、その副賞として2018年グローバルリンク・シンガポールに招待された。シンガポール国立大学（通称NUS）で行われた課題研究発表会、ポスターセッションの部に高校3年（SGC2期生）が参加し、社会課題部門において準優勝を受賞した。</p>
事前準備	<p>2017年の全国高校生フォーラムの段階ではまだ論文を書き終わっていなかった。しかし2018年春からのSGクラスのロンドン研修の間、ロンドン大学SOAS校で英語の論文を仕上げ、また、ロンドン大学での講義や図書館での文献調べにより新しい見地を得ることができた。その内容を新しいポスターに反映させ、新しいポスター作成<資料2>を行った。また研究要綱<資料3>を英語で提出した。</p>
報告事項	<p>【プログラム概要】 グローバルリンク・シンガポールは、シンガポール国立大学の会場で行われた。アジア諸国（タイ・香港・シンガポール・フィリピンなど）の学生も参加していたが、日本の学生の割合が半分ほどで多かった。大会はポスターセッションかオーラルプレゼンテーション、自然科学部門、グローバルイシュー部門に分かれていた。 ポスターセッションでは、グローバルイシュー部門は37校、サイエンス部門は59校出場した。本校の生徒はポスターセッションの部門に1名のみ参加した。課題研究発表会だけではなく、アジアの学生との交流会も同会場で実施され、翌日は大学教授からのレクチャーの受講や大学のキャンパスツアーや最先端の技術開発をしている科学技術研究所の訪問などもあり、学生にとっては刺激の多い内容だったのではないかと思う。</p> <p>【審査について】 グローバルリンク・シンガポールの課題研究発表のエントリーの方法や審査については不明な部分が多かった。オーラルプレゼンテーションは人数に縛りがあり審査員も複数だったが、ポスターセッションは生徒の票や教員の票も審査のうちに入っており、また審査員も少なくエントリーの方法審査の方法に疑問が残った。</p>

プログラム行程

	テ ー マ	行 程
7月20日（金）		羽田国際空港出発
7月21日（土）		現地到着後、午前観光 午後 NUS（シンガポール国立大学）でリハーサル
7月22日（日）	本大会	午前 レクチャー（大学教授） プレゼンテーション（アジアの学生） 午後 ポスターセッション 表彰式
7月23日（月）	スタディーツアー	1 サイエンスセンター 2 ナンヤン工科大学 3 昼食 4 ブロック 71 5 フュージョンワールドレクチャー（大学教授）
7月24日（火）		自由時間だったため、博物館見学 午後 チャンギ空港出発

成果・所感

国外で高校生を対象とするこのような大会は今後も幅広く開催されることが望ましいと思う。このような研究発表会の社会課題部門では、その国が抱えている社会課題についての考察などが課題研究の内容となる。そのため、他国の事を知る上でも、また自国と同じような課題に同じ高校生としてどのようにアプローチしようとしているかを考察できることは大変よい機会といえる。

今回は **JTB** の企画ということだったが、参加費用は滞在日数の観点からみてもかなり高額であった。

アジア架け橋プロジェクトに参加している留学生と共同研究や、国内で国外の学生も参加する大会があると日本の学生が今後学びを深めてゆくうえで大いに刺激になるのではないかと思う。



ポスターセッションの様子



表彰式

Endangered Minority Languages in Thailand

To what extent is the Karen language dying out ?

1. Background information

At least **23** minority ethnic groups (McKinnon, 2009)



↓

Thailand is a **multi-lingual** country

2. Research Question

To what extent is the Karen language dying out?

Hypothesis
English is eroding the Karen language.

3. Research Method

Date: 5th-19th July, 2017 / 13th April -25th May, 2018

Place: Northern Thailand, SOAS (University in London)

Fieldwork methodology: Observation, Interview, Questionnaire, Bibliography research

4. Findings Current state of the Karen language

i) Observation at a Karen village



ii) Bibliography research at SOAS library in London



Only **2** villagers could read this allegory.

Karen alphabet is vanishing

iii) Interview at an NGO



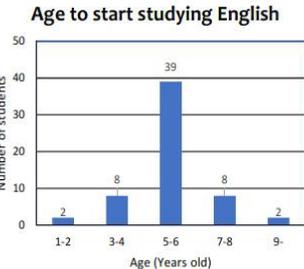
Q. How do you support the Karen?

- ✔ Culture, Education
- ✘ Language itself

4. Findings Influence of English

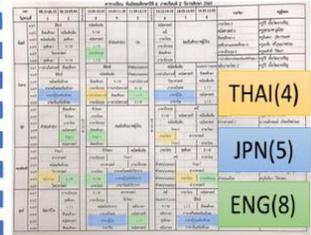
Questionnaire at a high school | Timetable of the 11th grade

Age to start studying English



Age (Years old)	Number of students
1-2	2
3-4	8
5-6	39
7-8	8
9-	2

65% of students started to study English at **Kindergarten**

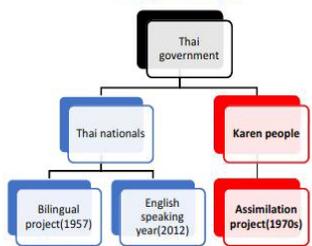


English language classes take up the most time

- THAI(4)
- JPN(5)
- ENG(8)

5. Discussion

Legal policies conducted by the Thai government



Thai Constitution (2017)



Section 70

The state should **promote and provide protection for different ethnic groups** to have the right to live in the society according to the **traditional culture, custom, and ways of life** on a voluntary basis.

6. Conclusion

- The Karen language is in a **critical and complex situation** due to the erosion of the **Thai language** and the **law restrictions** conducted by the Thai government
- English** has a stronger influence over the **Thai nationals**, but not the Karen language speakers.
- It is suggested to make a change from both **educational and legal position.**

Bibliography

- Austin, Peter. and Simpson, A. 2007. *Endangered Languages*. Germany: Helmut Buske Verlag
- Barry, C. 2013. *RIGHTS TO CULTURE: Heritage, Language, and Community in Thailand* Silksworm
- Gedney, W. 1989. *SELECTED PAPERS ON COOPERATIVE THAI STUDIES*. The United States of America: Center of South and Southeast Asian Studies the University of Michigan
- Johnson, G. and Symonides, J. 1998. *THE UNIVERSAL DECLARATION OF HUMAN RIGHTS: A HISTORY OF ITS CREATION AND IMPLEMENTATION*. UNESCO
- McKinnon, J. and Vienne, B. 1989. *HILL TRIBES TODAY*. Bangkok: Siripat
- Phinney, F. 1914. *Karen Reading Book*. Rangoon: American Baptist Mission Press
- Robert, B. and Jones, JR. 1961. *Karen Linguistic Studies; Description, Comparison, and Texts*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press

Global Link Singapore 2018 : Abstract for Social Issue Project
Submission Deadline : 31st May, 2018

Study Area *Please mark a circle on your subject

Culture	History	Religion	Race	Language	Education
Diplomacy	Security	War and Peace	Economy	Poverty	
Environmental Studies	Sustainable Development	Resources and Energy	Food and Agriculture		
Ethics and Universal Values	Human Right	Labor	Population		
Region and Public Policy	Urban Living Environment	Medical Care	Health and Welfare		
Disaster Prevention and Rehabilitation	Tourism	Others ()		

Category *Please mark a circle on your presentation style

Oral Presentation / Poster Presentation

Presenter(s)

【School Name】 Kosei Gakuen Girls' High School
【Project Member(s)】 Aika Tokuhisa, Sari Sakayauchi

Abstract of Presentation

【 Title 】 ENDANGERED MINORITY LANGUAGES IN THAILAND ~A Case Study of Hin Lad Nai Karen Village~
【 Introduction/Background/Motivation 】 Thailand is a multi-ethnic country which has 23 ethnicities including Mon, Lao, Lisu, and Karen. Such ethnic groups speak their own languages, so called minority languages. The wave of globalization has recently made English a powerful lingua franca around the globe. This study is to figure out the link between language promoting and its cultural sustainability.
【 Research Purpose/Problem Statement 】 Research question: What kind of problems are the minority languages experiencing in Thailand? Hypothesis: English is dominating minority languages. Hence the identities of such speakers are vanishing. Purpose: To investigate whether the globalization, national laws from the nation, or the lingua franca English has influenced the traditions of the speakers of minority languages and make a suggestion recording how to confront such issues among minorities.
【 Study Plan/Approach 】 Observation at Hin Lad Nai Karen village in Chiang Mai Questionnaire at a high school in Chiang Mai Interview at the Mirror Foundation (NGO) Bibliography research at SOAS (The School of Oriental and African Studies) University

【 Results and Discussion 】

1. The Karen language exists in a complex environment and it is in danger of vanishing due to the restrictive policies and laws enacted by the Thai government.
2. The policy of the Thai government has created a double-standard for not only minority groups, but also Thai nationals.
3. There are several NGO's that aim to preserve minority cultures, but not the languages.

【 Future Study Plan 】

Deepen the study about the minorities from the law perspective at university studies.

Participate in some organizations which helps to preserve the identity of minorities.

【 References 】

Peter K. Austin, Andrew Simpson (2007). *"Endangered Languages"* HELMUT BUSKE VERLAG

John McKinnon and Bernard Vienne (1989). *"HILL TRIBES TODAY"* White Lotus-Orstom

William. J. Gedney (1989). *"SELECTED PAPERS ON COMPERATIVE TAI STUDIES"* Center of South and Southeast Asian Studies The University of Michigan

M. Glen Jhonson and Janusz Symonides (1998). *"THE UNIVERSAL DECLARATION OF HUMAN RIGHTS: A HISTORY OF ITS CREATION AND IMPLEMENTATION"* UNESCO

Coeli Barry (2013). *"RIGHTS TO CULTURE: Heritage, Language, and Community in Thailand"* Silkworm books

第2節 国際理解および国際協力に関する研究発表会

11月10日(土)、東京都国際教育研究協議会が主催する「国際理解および国際協力に関する研究発表会」に生徒1名が教員1名と共に参加した。本校がこの発表会に参加するのは初めてである。

1. 開催概要

- 1) 日時 平成30年11月10日(土) 14:00-17:00
- 2) 場所 東京都立板橋有徳高等学校 大会議室
- 3) 主催 東京都国際教育研究協議会
- 4) 参加校 聖徳学園高等学校、東京学芸大附属国際中等教育学校、三田高等学校、順天高等学校、立川国際中等教育学校、本校の計6校12名
- 5) 目的

国際理解及び国際協力に関する研究協議会を開催し、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の機会を活用して国際社会を支える人材の育成について、東京都国際教育研究協議会としての考え方を協議する。同時に高校生や中学生による、国際理解・国際協力・国際ボランティア等の活動報告、研究発表の場を設定する。この発表をとおして、多くの人々にすばらしい活動を知ってもらい、この分野で活躍する生徒の連携・発展・活性化を目指すことも目的とする。

全校生徒がSGH課題研究の成果を共有することにより、国際的な社会問題とその課題解決への関心や意欲を喚起し、日々の学びと進路実現に好影響となることを目的とする。

2. 次第

1. 開会式・会長挨拶
2. 国際理解・国際協力に関する生徒研究発表
 - ①「タイの生活環境と学歴格差」(校成学園女子高等学校)
 - ②「2018年度国際交流ボランティア活動について」(聖徳学園高等学校)
 - ③「世界のサステナビリティを学ぶ留学」(東京学芸大附属国際中等教育学校)
 - ④「ユネスコ委員会活動の報告」(三田高等学校 ユネスコ委員会)
 - ⑤「フィリピンフィールドワーク派遣報告」(順天高等学校)
 - ⑥「ルーマニアで考古学のボランティア Archaeological volunteer in Romania」(立川国際中等教育学校)

3. シェアタイム

自己紹介・質問タイム・ブレインストーミング
グループワーク「今日の発表で印象に残ったこと」
「今後これをどう活かしていきたいか」
*教員達も意見交換グループワークを実施
グループ発表

4. 講評・閉会式



3. 本校の発表内容

本校からは SG クラスの高 2 生徒 1 名が参加し、「タイの生活環境と学歴格差～タイの山岳民族と私立高校に通う生徒～」と題して発表した。タイ・フィールドワーク研修時のインタビューや観察などをもとに、都市部と山岳部においてどのような教育面での格差があるか考察した。



4. 考察

1) 参加生徒への影響

本校参加生徒の振り返りによると、他校の国際プログラムが生徒主体で行われていることに最も刺激を受けたとのことである。例えば、聖徳学園高等学校の「国際交流ボランティア」では、生徒が自分たちで外部講師との連絡調整をし、さらにはホームページを作成して活動内容を周知しているとのことである。また、トビタテの制度を活用して米国やルーマニアに短期留学した生徒の発表も刺激になったようである。

本生徒は翌月、「2018年度 筑波 - 香港大学グローバルリーダーズ・プログラム」研修生の募集に自ら応募し、二段階の選考に合格して香港行きを勝ち取った。他校の生徒の主体的な取り組みに触発され、その後の行動に影響を与えた好例と言えるだろう。

2) 研究紀要

本大会出場者は全員、2019年3月に発行される研究紀要「国際教育 46号」に研究内容を寄稿することができる。本校では毎年 SG クラスの論文を論文集として纏めているが、外部機関の研究紀要に寄稿するという機会を頂くのはこれが初めてとなる。生徒のアウトプットを、研究発表会というオーラルなプレゼンテーションだけで終わらせず、多くの方が目に触れる研究紀要への寄稿という形に仕上げる機会を頂けることは大変有り難いことであり、本大会に今後も参加する意義の1つとなると考える。

3) 教員間の情報交換

本大会では、生徒達がワークショップ活動をしている間に、引率教員達もグループになって意見交換会を行った。公立高校3校と私立高校3校からの参加ということもあり、普段なかなか聞く機会のない各学校独自の取り組みを聞くことができた。その後もメールで情報共有をさせていただいている。生徒だけでなく、教員にとっても収穫のある大会であった。

第3節 SGH 全国高校生フォーラム

有楽町の東京国際フォーラムにて、第2回目となる2018年度SGH全国高校生フォーラムが開催された。SGH指定校123校をはじめとする全国146校の代表生徒が一堂に会し、英語でのポスターセッションやグループディスカッションを通じて、日々取り組んでいるグローバルな社会課題の研究成果を発信した。

1. 開催概要

- 1) 日時 平成30年12月15日(土) 10:00-17:00
- 2) 場所 東京国際フォーラム ホール E2 ガラス棟 G 会議室
- 3) 主催 文部科学省、国立大学法人筑波大学
- 4) 参加校 SGH指定校123校・アソシエイト18校、開催地である東京都の高等学校5校計146校
- 5) 目的 英語でのポスターセッションやディスカッションを通して、日頃取り組んでいるグローバルな社会課題・ビジネス課題の解決や提案について英語で発信する場を設けるとともに、今後の課題研究の深化や意欲の向上を図ることを目的とする。

2. 次第

1. 受付(ポスター掲示他)
2. 開会式・全体説明
3. ポスターセッション
4. 生徒交流会【テーマ別分科会】
5. 休憩(教育関係者向けイベント実施予定)
6. ポスターセッション
7. 生徒交流会【テーマ別分科会】
8. 生徒交流会【全体会】
9. ポスターセッション優秀校4校による発表
10. 表彰式・閉会式

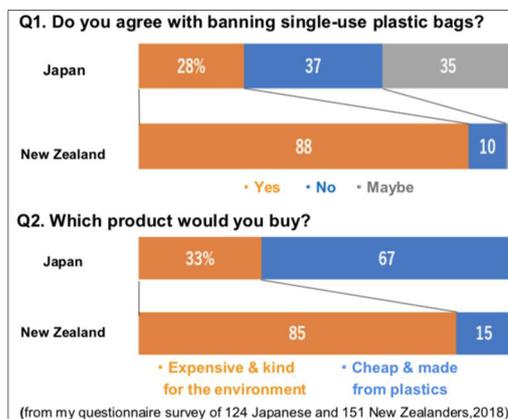


3. 本校のポスター発表内容

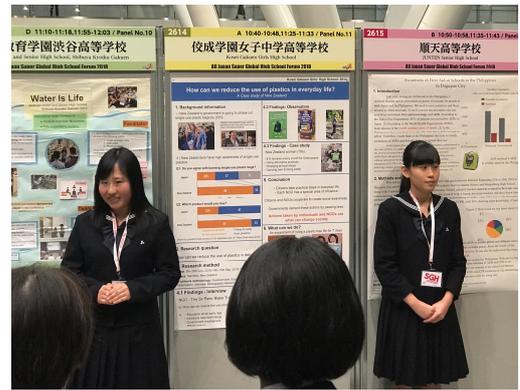
本校からは高2留学クラスの生徒と高2SGクラスの生徒がペアとなってポスターセッションに出場した。

研究テーマは「How can we reduce the use of plastics in everyday life? -A Case Study of New Zealand- (どのように日々の生活の中でプラスチックの使用量を減らせるか ~ニュージーランドの事例研究~)」。

ニュージーランド政府は今年8月、プラスチック製の使い捨てレジ袋を来年7月までに全面廃止する方針を発表した。右のグラフは、本生徒がニュージーランドと日本の両国の高校生を対象に調査したアンケート結果である。両国の若者の環境意識には歴然とした差があり、



本生徒はこうした意識の差がなぜ生まれるのかという問題意識のもと、どうすればプラスチックの使用量を減らせるか、環境 NGO へのインタビューや1年間滞在したホスト宅での参与観察などの手法を用いて調査した。その結果、市民や NGO の日常的な活動が世論を喚起して政府を動かし、先進的な環境政策を実現しているという構図を見出した。私たち一人一人の日々の活動が社会を動かすことを実証した好例といえる。本生徒は研究から導かれた結論をもとに、7日間、Plastic-Free Life (プラスチックを使わない生活) を実践し、研究成果を実生活に結びつける行動の意義を訴えた。



4. 考察

1) 出場に向けた準備

生徒達は準備の段階において大きな成長を見せた。本生徒は1月から12月初めまでニュージーランドに留学をしており、フォーラムへの出場準備が帰国前後の時期と重なったため、きわめて多忙な状況であった。そうした中でも、帰国前からポスターの作成にとりかかり、google drive 上で指導教諭とポスターを共有して助言をもらいながら、内容・構成・表現すべてにおいて最高のポスターを提示しようと、数え切れないくらい手直しをして、精力的に準備を進めた。特に内容面で大きな進化が見られた。

当初は、日本とニュージーランドの高校生に対するアンケート結果をもとに、両国の環境意識に差があるということを経験結果の中核においていたが、そこから「なぜそのような差が生まれるのか」という問題提起に発展させ、どのようにすればプラスチックを減らせるのか、具体的な行動のありようを提示することに重点を置く内容とした。これにより、アンケートという量的調査で済ませず、参与観察など質的調査の側面が加わり、立体的な研究になったと言える。

また、生徒達はプレゼンにも工夫を凝らした。聴衆に問いかける話し方を試みたり、ニュージーランドのエコバックや竹製の歯ブラシを実際に見せたり、聴衆の視点に立って興味関心を喚起するための練習を重ねた。このような試行錯誤を重ねて本番にむけて準備する姿を見守った教員たちにとって、こうした過程にこそ最も教育的な効果を感じることができた。

2) 振り返りおよび次へのつながり

今回のフォーラムでは受賞はかなわなかったものの、良きフィードバックを得ることができた。審査員の先生からは、「ニュージーランドでの取り組みが日本でどのように活かせるかの考察が欲

しい」「日本でプラスチックに対する行動が広まらないことの背景や理由をもっと多面的にとらえるべき」というご意見を頂いた。生徒達はこうしたフィードバックを踏まえ、日本国内での更なる調査の必要性を感じたようである。早速、翌1月には以下の調査活動を行った。

- ・プラスチック加工メーカーを訪問し、営業担当者へインタビュー。
- ・国連大学サステナビリティ高等研究所主催「SDGs への挑戦 プラスチックごみ問題の解決に向けて」というセミナーに参加し、環境省の担当室長および環境 NGO 代表理事へ質問。

上記の追加調査を踏まえて、翌2月の「第4回高校生国際シンポジウム」参加者募集に自ら応募し、書類審査を経て参加資格を獲得した。開催地である鹿児島までの旅費は自己負担であったが、保護者を説得した上で参加を決断したとのことである。学校代表として SGH 全国高校生フォーラムに出場したという結果に満足せず、さらなる成長を目指してすぐ行動に移す姿勢は、全校生徒の模範となっている。

3) 全校への周知

上述の通り、SGH 全国高校生フォーラムは出場生徒達にとって大きな学びの効果を得る貴重な機会となったが、この効果を全校生徒に波及させることが重要と考えている。そこで、12月22日（土）の二学期終業式において、出場生徒による大会出場の報告とポスター発表の実演を全校生徒に披露する時間を設けた。特に高校1年生や中学生にとっては、先輩の研究発表を見ることにより、自分たちが目指すべきゴールをイメージする良い機会となった。また、ホームページや学内誌「SGH Times」「校報」においても特集記事を組んで学内外への周知に努めた。

4) フォーラムへの貢献

今回、前年度優勝校として総合司会および分科会司会に指名され、フォーラムの運営面でも貢献する機会を得ることができた。それぞれの司会にはあえて高校1年生の4人を選び、大きな舞台を経験させて成長の機会となるようにした。高校生主体で大会を運営できるよう、今後もこうした機会があればぜひ協力させて頂きたいと考えている。



第4節 第3回関東・甲信越静地区 SGH 課題研究発表会

2018年12月23日(日)、立教大学池袋キャンパスにおいて、「第3回関東・甲信越静地区 スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会」が開催された。この大会には関東・甲信越静地区のSGH指定校21校より、プレゼンテーション49チーム、ポスター発表53チームが集まった。

1. 開催概要

- 1) 日時 平成30年12月23日(土) 10:00-17:00
- 2) 場所 立教大学 池袋キャンパス 11号館、マキムホール
- 3) 主催 立教大学
- 4) 参加校 関東・甲信越静地区SGH指定校21校
プレゼンテーション49チーム、ポスター発表53チーム

2. 次第

1. 受付(ポスター発表者は掲示)
2. 開会式・全体説明
3. 課題研究プレゼンテーション 10:35~15:40
課題研究ポスター発表 11:40~12:40/13:35~14:35 ※交代制
4. 表彰式

3. 概要

本校からは、プレゼンテーション発表(英語部門)に2組、プレゼンテーション発表(日本語部門)に2組、ポスター発表(英語部門)に5組の生徒たちが参加した。以下は出場した生徒たちの発表テーマである。

〈プレゼンテーション発表(英語部門)〉

- KGGS14期生1名:「ニュージーランドと日本における教育による男女平等」
- KGGS14期生1名:「How Culture Differences Impact the lives of Immigrants」

〈プレゼンテーション発表(日本語部門)〉

- SGC3期生2名:「タイの農業政策と地方の実態」
- SGC4期生2名:「学外教育における世代間格差—スタディクーポンの必要性—」

〈ポスター発表(英語部門)〉

- SGC3期生3名:
「The Difference of consciousness about animal right issues between Japan and Thailand」
- KGGS14期生2名:「Outdoor Education in New Zealand: A Case Study」
- KGGS14期生2名:「How We Can Solve the Medical Waiting List Problem in New Zealand」
- KGGS14期生2名:「The Differences between Japanese Comedy and New Zealand Comedy」
- SGC4期生3名:
「Solution to Japan's Declining Number of Children Considering Advanced Cases Overseas」

第5節 SGH 甲子園

SGH 甲子園 2018「全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表」

- 日時：平成30年3月24日（土）10：00～17：00
- 場所：関西学院大学（兵庫県西宮上ヶ原キャンパス）
- 参加生徒：SGC2期生（2名）
- 引率教員：片桐正雄

目的 スーパーグローバルハイスクール（SHG）指定校の本校生徒が、課題研究に取り組んだ日々の研鑽を発表する場として、全国のSGH指定校・SGHアソシエイト校が一堂に集う日本最大規模のイベントに参加し、その成果を競い合うとともに日本全国の高校生とコミュニケーションをとりながらお互いを高め合うネットワーク作りの場とするため。

事前学習 2017年10月24日（火）～11月24日（金）応募期間
SGC2期生の中から応募するも応募多数のため抽選とする。
結果「研究成果プレゼンテーション」部門1組（2名）・「研究成果ポスタープレゼンテーション」部門2名選出。
2017年12月19日（火）
「研究成果プレゼンテーション」部門では1次選考で落選、本選出場ならず。
「研究成果ポスタープレゼンテーション」部門では1次選考はなく、本選出場決定。
2018年3月7日（水）15：30～16：00 於グローバルセンター
「行程表」配布 「持ち物」諸注意

報告事項 関西学院大学・大阪大学・大阪教育大学（共催：早稲田大学）が主催するSGH甲子園2018「全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表」は文部科学省によるSGH事業の一環として行われている。3つのプログラム、「研究成果プレゼンテーション」部門25チーム、「研究成果ポスタープレゼンテーション」部門97チーム、「ラウンドテーブル型ディスカッション」部門18名で、全国各地から多くのSGH校が参加した。日本最大規模のイベントということもあり、会場となった関西学院大学のキャンパスいっぱい全国からやってきた高校生であふれ活気が感じられた。

本校からは、2期生（高校2年）の2名（西村七海・曾根帆華）が「研究成果ポスタープレゼンテーション」部門に出場した。「高校生から見た“フェア”なハンディクラフト」をテーマに、フェアトレード商品（ハンディクラフト）を高校生の中に普及するための具体的な方法を提案し、広く訴えた。7月に行ったタイでのフィールドワークをもとに現地の状況と日本での（特に同世代の高校生）アンケート調査に基づき、ポスターセッションをおこなった。ポスターを展示するだけでなく、タイのクロントゥーイスラムでデザイナーとしてブランド（Fee Mu）を立ち上げたFUJITA PEさんの商品を展示しながら、多くの聴衆からの質問にも熱心に受け答えし、概ね賛同を得たようだった。5分間のプレゼンテーションののち2分間の質問時間を設け、それを午前中に2回、午後には2回の計4回の形式で、

それ以外の時間には本校生徒も全国から集まった学校の発表を見学し、大いに勉強になったようである。

● プログラム行程

行 程	
3月23日 (金)	11:30 東京駅「銀の鈴」集合 12:10 東海道新幹線(のぞみ31号)・昼食(各自車内) 14:54 新神戸駅着 15:30 立正校成会神戸教会着 教会スタッフにご挨拶・ポスタープレゼンテーション練習 18:30 夕食 20:00 入浴 20:45 ポスタープレゼンテーション練習 22:00 就寝
3月24日 (土)	6:00 起床・洗面・清掃 7:00 朝食 7:30 神戸教会出発 8:00 阪急電鉄神戸線「神戸三宮」駅発 8:30 関西学院大学・上ヶ原キャンパス着 受付・ポスター設営 10:00 開会式(@中央講堂) 11:00 ポスタープレゼンテーション開始 各自昼食 (本校はB組 ①11:10～ ②12:10～ ③13:10～ ④14:10～) 16:00 表彰・閉会式 17:00 関西学院大学発 18:06 新神戸駅発(のぞみ46号) 20:53 東京駅着・解散



成果：

校内で課題研究の発表の機会があまりない中、このような全国レベルの大会に出場できる機会に恵まれ、生徒としては大いに刺激になった。発表内容は本校で7月に行ったタイフィールドワークで生徒が研究テーマとして挙げた「フェアトレード」についてのプレゼンであったが、質問者から「ハンディクラフト」と「高校生」をつなげ「フェアトレード」に結び付ける発想について感心されたり、アドバイスを頂いたりすることで、生徒達にとっては自分の研究について第三者に認められ自信となったようである。

第6節 第4回 高校生国際シンポジウム

2019年2月8日(金)・9日(土)、サンエールかごしまにおいて、「第4回 高校生国際シンポジウム」が開催された。本校からは今年度初めてこの大会に参加することになった。ポスター発表1組とスライド発表1名の合計2組が参加した。

1. 開催概要

- 1) 日時 平成31年2月8日(金) 10:00-20:00、2月9日(土) 10:00-16:20
- 2) 場所 サンエールかごしま(鹿児島県鹿児島市荒田1丁目4-1)
- 3) 主催 一般社団法人 Glocal Academy
- 4) テーマ 人類の英知の上に立ち、未来を創る
- 5) 目的 日頃の研究成果をスライド発表やポスター発表としてまとめ、生徒が自らの研究成果を発表するとともに、参加者間の交流を深めながら今後の進路選択や社会への理解を深めていく。
- 6) 参加数 31校 (スライド発表37組、ポスター発表44組)

2. 次第

【1日目】2月8日(金)

1. 受付
2. 開会行事
3. 基調講演 齊藤英治氏(東京大学 物理工学専攻・物理工学科 教授)
4. 研究発表コンテスト
5. 交流会・研修会

【2日目】2月9日(土)

1. 受付
2. パネルディスカッション
3. パネリスト、審査員との交流会
4. ゲスト講演 日下部元雄氏(元世界銀行副総裁、(株)オープン・シティー研究所所長)
5. 表彰式・講評

3. 概要

本校からは2組(3名)の生徒が参加した。以下は研究発表のテーマである。

〈スライド発表部門〉

KGGS14期生1名:「The Importance of a Rainbow Diversity Group in a School」

〈ポスター発表部門〉

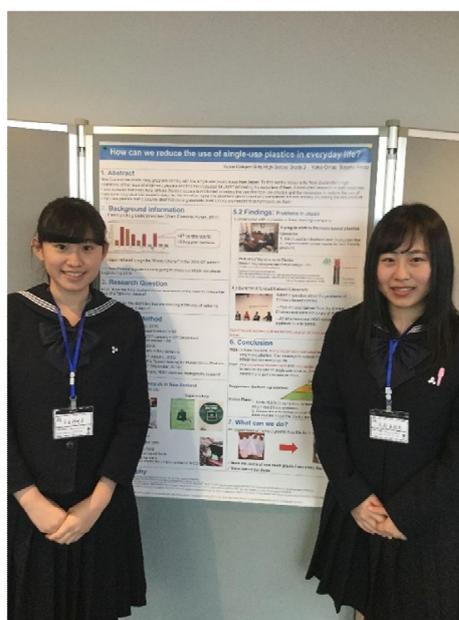
KGGS14期生とSGC3期生:

「How Can We Reduce the Use of Plastics in Our Everyday Life? -A Case Study of New Zealand」

発表者のうち、ポスター発表部門に参加した2名の生徒は、社会課題部門で優秀賞を受賞した。このグループは昨年行われた「SGH 全国高校生フォーラム」にも参加したが、研究をさらに深めた上での参加となった。

以下が前回の発表から改善した主な点である。

- SGH フォーラムで評価された用紙に、「プラスチックが及ぼす世界的な影響について触れると良い」とあったため、国連が発表したプラスチックの報告書と、昨年の G7 の決定事項を元にして日本がプラスチック削減に積極的でないという研究背景を補足した。
- ニュージーランドがプラスチック削減に積極的な姿勢を日本と対比する形で示した。
- リサーチクエストが「どうしたら日々の生活の中でプラスチックを減らせるか」という抽象的なものだったため、「どうやって NZ はプラスチック削減に対する意識を高めたか」「日本で削減を推し進める際に何が障害になっているのか」というより具体的なものにした。
- 日本の使い捨てプラスチックを製造、販売している企業にインタビュー調査を行った。これにより、プラスチックが環境に悪いという風潮の中で、どのような経営方針なのか、プラスチック業界の状況、現状の問題点などを明らかにした。
- 国連大学で開催された SDGs とプラスチックゴミのセミナーに参加し、今のプラスチックと環境に対する、政府、NGO の対応を調べた。また、質疑応答の時間にバイオマスプラスチックの問題点についてどう思うか 4 人の専門家に聞いた。
- 結論としてプラスチック削減の為の提案を盛り込んだ。
- 実際に実験することで提案の実現可能性を示唆するとともに、削減を進める際の課題を提示した。



(第 2 部文責：宮川典子、秋田聡大、片桐正雄、崎山隆則)